

熊本県博物館ネットワークセンターだより 熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター

2023年7月4日



No. 55

イベント情報 (令和5年7月～令和5年10月)

企画展 会場：熊本県博物館ネットワークセンター 入場無料

第1回企画展「くまもと絵葉書ものがたり」

絵葉書に使用された題材に着目しながら、明治時代から昭和時代の熊本県に関する絵葉書を紹介し、当時の人々が絵葉書として形に残そうとした出来事や風景を振り返ります。

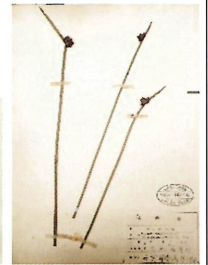
○開催期間 令和5年5月23日(火)～7月23日(日)



第2回企画展「よみがえる学校の標本たち ～熊本県内の理科室から～」

昔、学校の理科室で使われていた押し葉、剥製、貝殻、岩石、化石、鉱物などの標本を皆様にお見せします。

○開催期間 令和5年8月1日(火)～10月1日(日)



フィールドミュージアムへ飛びだそう！

プログラム	場所	日時	定員	内容	申込期間
川原の石ころ図鑑をつくろう	氷川町 立神峡	7月29日(土) 10:00～12:00	20名	川原のいろいろな石を観察します。	6月22日～ 7月13日
夏の星空を観察しよう	熊本市南區城南町 県民天文台	8月18日(金) 19:30～21:30	60名	天体望遠鏡で、夏の星座や天の川の観察を行います。	7月13日～ 8月3日
水辺の生き物を観察しよう	八代市 ほたるの里公園	9月23日(土・祝) 10:00～12:00	20名	魚や水生昆虫など水中の生き物を観察します。	8月17日～ 9月7日
月の観察をしよう	熊本市南區城南町 県民天文台	9月29日(金) 19:30～21:30	60名	天体望遠鏡でとらえた月の様子を観察します。	8月24日～ 9月14日
植物体感ウォーク	和水町 肥後民家村	10月7日(土) 10:00～12:00	20名	植物のいろいろな特徴を体感します。	8月31日～ 9月21日
海岸の砂から砂鉄を探そう	上天草市 松島町の海岸	10月22日(日) 10:00～12:00	20名	専門家とともに付近の地層を見学し、砂鉄を探します。	9月14日～ 10月5日
落ち葉図鑑を作ろう	上天草市 天草ビジターセンター	12月3日(日) 10:00～12:00	20名	落ち葉を集めて世界に一つの落ち葉図鑑を作ります。	10月26日～ 11月16日
水辺の冬鳥を観察しよう	熊本市 江津湖	12月23日(土) 10:00～12:00	20名	カモ類など、江津湖にやってくる鳥を観察します。	11月16日～ 12月7日

対象：幼児～一般 ※小学校3年生以下は保護者同伴

申込み方法：熊本県・市町村共同システム「電子申請サービス」または、往復はがきに参加者全員の住所、氏名、年齢、電話番号、参加希望プログラム名をご記入の上、申し込みください。申込み多数の場合は抽選で参加者を決定します。右側のQRコードからも申し込みができます。

(往復はがきで申込みの場合は、返信用はがき住所・氏名を記入してください。締切必着。)



記載されている行事は、感染症や災害等の影響により日程や募集人員が変更になる場合があります。詳細は当センターにお問い合わせいただくか、ホームページで御確認ください。

No. 284
植物

アイ *Persicaria tinctoria* (タデ科)

タデアイとも言い、青色の染料となる植物です。日本へは中国から伝わってきたとされており、野生状態で生育していることはほぼなく、染料にすることを目的に栽培されてきた植物です。青色の染料植物と言っても、健康に生育している状態のアイは青い色をしておらず、他の植物と同様に緑色をしています(図1)。青色になる物質が、植物体内ではインジカンという無色の物質の状態で細胞内に存在しているためです。葉がちぎれたりして細胞が壊されると、インジカンが酸化されて最終的にインディゴという物質に変化して青色を呈いします。写真の標本(図2)では、標本にする過程でインディゴができ、葉の色がやや青色ががっています。採集日は「大正十年九月二十六日」と記されています。102年を経て植物の色や形を今に伝えており、標本を作り残す意義をはっきりと示しています。

この標本は、県内の公立高校から寄贈された標本に含まれていました。ラベルを見ると「島津製作所標本部選集」とあり、会社が標本を作成し教材として販売していたものだと考えられます。教育や学習において実物を見て感じることの重要性は、今も昔も変わりません。貴重な体験学習の機会を約100年前は標本が支えていたことを示している資料です。(前田 哲弥)



図1 アイの生育状態(栽培)



図2 アイの標本

No. 285
歴史

うじこしらべおたっしうつし

氏子調御達写(高森町安藤家資料)

廃藩置県が行われた明治4年(1871)、政府は「大小神社氏子調」の政策を定め、全国に布告します。これにより新生児は全員、地域行政の責任者である戸長と居住地の神社へ届け出、引き換えに氏子札を受け取るように定められ、新生児以外にも同様に戸長に氏名、住所などを届け出て、神社から札を受け取ることが定められました。受け取った氏子札は身分証を兼ねることとされていました。

本資料は、氏子調の実際の手続きについて政府から藩庁を通じて伝達された「氏子改仮規則」うじこあらためかりきそくの写しです。この規則には神社へ提出する名簿の書き方、神社が交付する札の書き方が事細かに示され、また、神社の担当者が官庁へ提出しなければならない氏子名簿の書き方についても様式が詳しく例示してあります。写しを作った安藤定雄は明治初期、野尻川上神社(現阿蘇郡高森町)で神官を務めていたことから、実際にこの資料を見ながら業務に当たっていたのかもしれませんが、明治初期において、戸籍の把握がどのように行われたか、その一端を窺い知ることができる資料といえます。(古澤 広大)

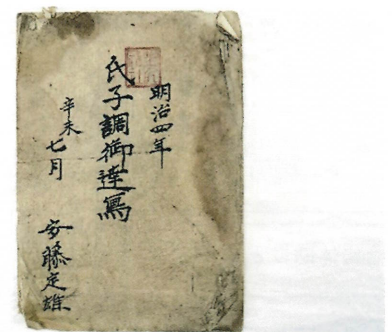


図1 表紙



図2 札の様式

No. 286
地学

二枚貝の化石

熊本県博物館ネットワークセンターには、県内の学校の理科室からやってきた標本があります。それらは教材や先生・生徒が採集したものです。ここでは、高校生が授業で採集した岩石から作成した標本を紹介します。

宇城市松橋町の岡岳周辺には中生代白亜紀中期（約 1 億～9000 万年前）に堆積した砂岩や泥岩の地層（御船層群下部層）が分布しています。この地層は貝の化石を多く含んでいます。約 30 年前、岡岳山麓での工事中に化石を含む地層が露出しました。図 1 はその時に採集した岩石です。

化石を含む岩石はそのままでは標本にならないものがほとんどなので、クリーニングをして化石を取り出します。ミュージアムパートナーズクラブ「地学研究会」では、図 1 の岩石をクリーニングして図 2 のような化石標本を作成しました。水色のものは、化石の特徴を調べるために型取りしたものです。

図 2 の標本には三日月形のプテロトリゴニアと小さな丸っこい三角形のエオミオドンという 2 種類の二枚貝化石があります。この地層からは全部で 7 種類の二枚貝化石が確認できました。

現在、この場所では化石の採集が困難ですが、過去に採集した化石が研究に役立っています。（廣田 志乃）



図 1 クリーニング前の岩石



図 2 二枚貝の化石

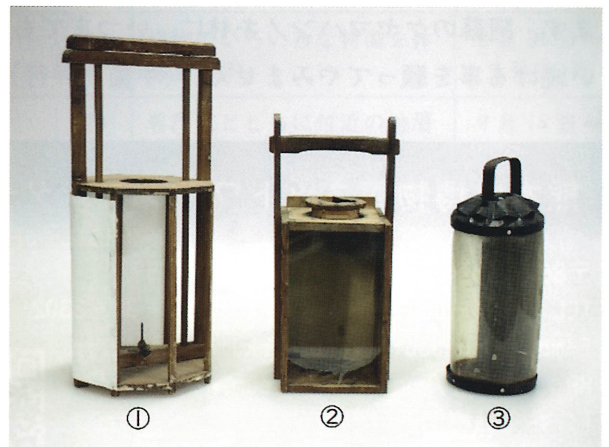
No. 287
民俗

コトボシ

コトボシは「小灯し」と書き、ちょっとした明かりという意味です。熊本県内では灯明とつみょうやろうそくの灯り、ブリキのランプ、またはそれらを入れて持ち運ぶ、図のような手提げのついた小型の行灯あんどんをコトボシと称していました。図の①は木枠に紙を張ったものですが、②は木枠にガラス板をはめ込んでおり、③はブリキとプラスチックで枠が作られています。いずれも光源にはろうそくを使っていましたが、同じくろうそくを使う提灯ちようちんとは区別されていたようです。

行灯は、もともとは紙を張った木枠で灯明を覆った携帯用の照明器具でしたが、江戸時代にろうそくを使う提灯が普及すると室内に据え置く大型のものに変化し、明治時代に石油ランプが普及すると室内でも使われなくなった、というのが一般的に知られた話です。

しかし実際は、すべてが提灯やランプに置き換わったわけではなく、県内では夜間の家の中の移動やちょっとした外出などで、持ち運びできる行灯、すなわちコトボシが昭和 30 年頃まで使われ続けていました。（迫田 久美子）



①葦北郡津奈木町 ～昭和 25 年

②宇土市 昭和 20 年～

③天草市 昭和 10 年～昭和 20 年

No. 288
動物

ミドリシジミ *Neozephyrus japonicus* (シジミチョウ科)

ミドリシジミ (図1~3) は、日本では北海道、本州、四国、九州に分布している、シジミチョウの一種です。雄は名前の通り、翅の表側が美しい金緑色をしていますが、雌は雄とは一見別種に見えるほど翅の色彩が異なっており、さらに、遺伝的多型があって、図4に示したA型、B型、AB型、O型の4つの型に分けられています。各型の出現比率は地域によって異なり、九州の生息地においてはほとんどの個体がB型 (図1右)、ときにAB型 (図3) で、A型やO型は非常に稀なようです。



図1 ミドリシジミ標本 (阿蘇郡一の宮町産)

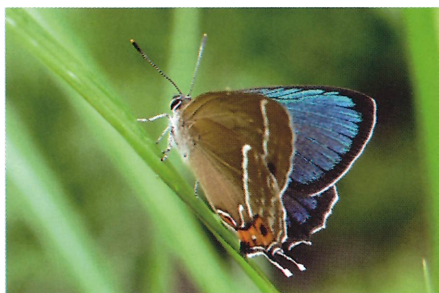


図2 ♂生態写真 (阿蘇郡小国町)

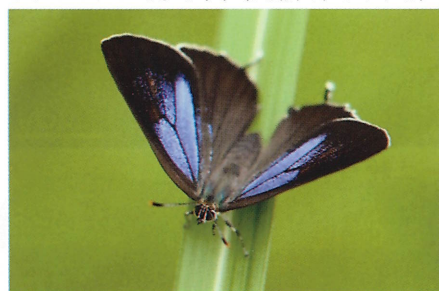


図3 ♀生態写真 (阿蘇郡高森町)

本種の幼虫はカバノキ科のハンノキ、ケヤマハンノキ、ヤハズハンノキなどの葉を食べて育つため、生息地はこれらの樹木がまとまって生えている林に限られています。熊本県内では阿蘇地域のケヤマハンノキ林のみに生息しており、国内分布の南限となっています。

本種を含むミドリシジミ類は、その美しさと希少性から愛好家の収集対象になりやすく、さらに熊本県産の本種は南限個体群とあって、常に採集圧の脅威にさらされていました。そのため2013年に「熊本県野生動植物の多様性の保全に関する条例」における指定希少野生動植物に指定され、採集等が禁止されました。しかし、各種開発行為に伴うケヤマハンノキ林の伐採は現在も進行しており、元々限定的だった生息環境は年々狭められています。

図1の標本は、いずれも1980年代後半に阿蘇郡一の宮町 (現 阿蘇市一の宮町) で採集されたものです。この場

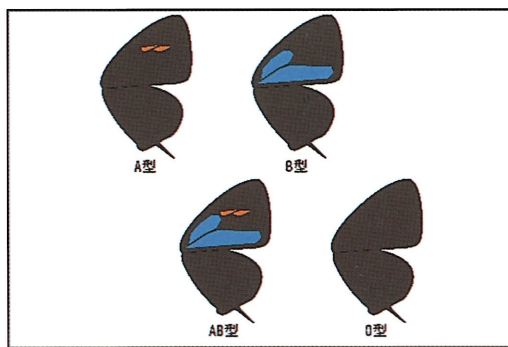


図4 ミドリシジミ♀の4つの色彩型

所は国立公園の特別地域となっており、環境は比較的よく保たれていると言えますが、生息地の分断・孤立化が進んでいる中、気候変動や山火事などによる絶滅のリスクは常に付きまとっています。阿蘇のケヤマハンノキ林に、いつまでもミドリシジミが舞い続ける事を願ってやみません。(中園 洋行)

熊本県博物館ネットワークセンター

ISIL JP-2004104

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1675

TEL : 0964-34-3301 FAX : 0964-34-3302

E-mail : hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

HP : <https://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

○九州産交バス

松橋バスターミナルより宮原経由

八代産交行き「希望の里入口」下車

○JR

松橋駅より約 3 km

